死星座の女

平　龍生

東京の山手線は一周三十四・五キロある。一時間五分ほどの所要時間で一巡することができた。

ボクは山手線クハ＜一〇三型、一〇四＞のナンバーの打たれた車輌の≪死者の指定席≫に、これで七年余もの間坐っている。

四季折り折りの風景、それに、人間模様などを倦（あ）かず眺めてきた。

もっとも　死者の席だから、モノクロトーン、色は識別できたが、やや、殺風景ではあった。

なぜって？この非現実の現実について語るのは難しい。

生きているときはこのボクだって、死んだ後の状況までは考えられはしなかった。

七年前の五月のある日が、ボクの死んだ日である。

その日のことから先ず語ることにしよう。

浅葱色（あさぎいろ）の新車は新宿駅九番線を十六時二十七分に発車した。ボクはこの電車のいちばん前の一輌目の車輌に乗った。

ほんとうは、この前の電車、二十四分発に乗っていたかも知れない。

九番線のホームに上る階段の下あたりで、ボクはちょっとショッキングな場面に遭遇した。売店前を通りすぎようとしたら、ボクの背後で、「ばしん…」という音がした。

振り向いたら一人の女が横倒しのかっこうで、コンクリート床の上に転っていた。

さっきから目にしていた向かい合いの男と女が、険悪な関係にあることは、ちらと投げた視線で、それとなくわかっていた。

男が不意打ちに女の頬を打った。ばたんと倒れた。それだけのことだった。

これもまた非現実の現実の一駒であった。

もう男は女に背を向けていた。

脱げた片方のハイヒールと、足元に投げ出されたハンドバッグ、決着のあとのそれが小

さな混乱状況のすべてだった。

ボクは、無遠慮な視線で、女の、のろのろした動きを見ていた。

唇の端が切れて、赤い血がにじんでいた。

「ああ、また男と女が訣（わか）れて行く」

ボクは薄い笑いを口元に浮かべていたように思う。男と女の数はおよそ半分ずつ、おたがいに相手のことがわかり合えるカップルなんて、ほんとうにいるのだろうかと、つねづね、ボクは思っていたからだ。

次から次へと人の波が寄せていた。男は押し寄せる人込みのなかにと、消えていた。

泣きべそを掻いている女は、ボクがきのう訣れたばかりの美香という女に似ていた。

齢は二十一、二歳、短い髪型も、目尻の少し吊り上った気の強そうなところも美香を思わせる。

と、そのとき、ボクは〝別視点の世界〟にと導かれていた。異体験をしていたのだ。

偶然にそよ風のように爽やかに…こんな表現は決して好きではないのだが、まさしくこれは五月のそよ風というやつだった。

ボクの横をすっと通りすぎた少女が、ふわ

っとあたたかな風でボクを包んだ。
それは不思議な感覚だった。
あたたかな光の波長とでも言えば、わかってもらえるだろうか。
「あっ…」
次にボクは声をあげていた。少女はもう一メートル余の先にいた。お下げの髪が揺れた。
中学の一、二年生なのか、紺のセーラー服の肩のあたりも見えていた。
が、ボクが、まばたきした瞬間、少女は裸身になっていた。細い裸の肩先、そして…ほっそりした腰の線、ボクは人込みを掻き分けて階段口の下あたりから、少女の裸の後姿を見ていたのだった。
ああ、幻であってくれればいい。
素っ裸の少女が人の群れのなかで、好奇な視線にさらされているなんて……。
あの少女はボクだけのものー矛盾している話だったが、ボクは裸身の少女に惹きつけられてあとを追ったくせに、そんな自分勝手な思いを少女の裸身に重ねていた。
だが、まわりの人間たちには混乱はない。だれも好奇な眼など向けてはいなかった。

そのとき、階段は電車から吐き出された人人に占拠された。上りの階段口が狭められ、ボクは少女の姿を見失った。

何人かの肩にぶつかった。

怒声がかぶせられる。あとからあとから行手を遮る人の顔が寄せてきた。

それでもボクは前に前にとつきすすむ。

だが、二十四分発の山手線外回りの電車に少女は吸い込また。

ぶつぶつ口のなかで、ともかくも、訳の分からぬことを呟きながら、九番線ホームのいちばん先まで、ボクは歩いた。

無意識のうちに…。

少女のあとを追いたい―そんな思いがあったのだろう。足だけが電車の進行方向にむけてすすんでいたのだ。次の電車を待つ。

新宿駅二十七分発の電章がすべりこり込んできた。一輌目のいちばん前の扉、ボクが足を止めたのは比較的空いている場所だった。

それで坐る席があった。

ボクは進行方向にむかって左側のいちばん前の席に坐った。この席は自分の意志で選んだ。空いている席は他にもあった。やはり、

先発車のあとを追う気持があったのかも知れない。が、環状線なのだ。いくら追っても距離は縮まりはしないのだった。

あたりの人の顔などまるで眼には入らない。ボクの頭のなかにあったのは、裸の少女のことだけで、それで、ボクは誘導されるようにして、その座席を選び、座ったのだ。

クハ一〇三型、一〇四号車は、それから、九分後に衝突事故を起す。

踏切で、後輪をパンクさせた一台の冷凍車が立往生していた。

一瞬、なにが起きたかはボクにはわからなかった。急ブレーキがかかり、数秒後に、電車の前部と冷凍車は接触した。

かなりのショックがあった。

ボクの〝意識〟はそこまでのこととなった。

座席に坐ったままボクは死んだのだった。どんな力学が働いたのかは知らない。

脳の細い血管が切れ、ほぼ即死の状態で、ボクは一人だけ、この事故で死んだ。

電車は、七十メートル手前でブレーキを掛けた。衝突したとき、スピードは減速されていた。大事故にはならなかった。

電車はわずかに左前部をへこませただけだった。ぎりぎりのポイントで停まったのである。それでも窓ガラスが破れ、凄い音がした。

その破片が一つ、ボクの左手首に突き立った。たいした出血量ではなかったのだが、気を失っているうちに、心臓部が異変を起こし、それが、致命傷の因となった。

ある光の溢れる五月の日の、午後四時三十六分が、ボクの死んだ日時であった。

その場所は山手線外回り「クハ一〇三型一〇四号車」、最前部車輛の左側、いちばん目の席が、ボクの《死者の指定席》となった。

死んでわかったことだが、生きている人間の体には、肉体（ボディ）、幽体（アストラル・ボディ）、心体（スピチュアル・ボディ）の三つがあるのだった。

ボクは肉体を喪なった死者となり、幽体と心体だけをもった、空気のような存在の人間となった。

その、空気のような存在のボクに与えられた《死者の席》で、ボクは生き続ける状態を、ひと先ずのところ強いられることになったのだ。一生を生き続ける…などと、表現するの

はおかしいのかも知れないが、意識を持ち続けるための≪指定席≫が、これを機にボクには用意されたことになる。

わが心体が幽体という空気のような肉体をもっているので、ボクは、生き続けているなどと、自分の置かれている状況を語ったのだ。

2

一つ気付いたことがあった。

≪死者の席≫に座ったことで、分かったことなのだが、自分の死を気付かずに、しばらくは、ボクは無為の日々を過ごした。

とつぜんの死を経験すると、自分の「死の状況」が、理解できなかったのだった。

ボクが死ぬ寸前まで考えていたことは、あの，裸の少女‘のことである―。

ボクだけに視（み）えた生きた人間の幽体、そのことがわかってきたのは、ボクが死んで一月余のあとのことだった。

ボクは自分の死を自覚することなく、ぼんやりと死者の席に坐っていたことになる。

事故を起こした車輌は運転席の左側の前部

だけを修理され、再び山手線外回りのレールの上を走ることになった。

ボクが自分の死を自覚したのは、運行開始の初日のことであった。

生きた人間たちが、当然のような顔をして、ボクの坐っている≪死者の席≫に坐った。

つまり、ボクの姿はだれにも視えてはいないのだった。だが、ボクには彼ら生きた人間の一人一人が、はっきりと視えた。

姿かたちだけではない。

人間の幽体のもつ光の輝きまで識別できた。

ボクに視えている世界そのものはモノクロトーンなのだが、幽体光が発する一人一人の光の輪郭は、はっきりと視えていたのだった。

死んだおかげで知ることのできた大事なことなのだが、人間には生れつきの“星の輝度”というものがあるのであった。

ちなみに、ボクの星の輝度は、「青輝色系統のグレード十四等」であった。

この各人のグレード差について、説明するのはちょっと難しい。

わかりやすく、人間のことばで言えば、人それぞれに生れながらの幽体光があり、その

光のグレード差が、輝きのちがいとなるということだった。ありふれた表現をすれば、〝生まれの星〟が、各人それぞれに、ちがうということになるのであろうか。

分類すれば左の五つの系統に分れる。

輝度差については示しようがない。

青輝色　白輝色　赤輝色

暗輝色　暗赤色

夜空の星を見るがいい。

幾億、いや、天文学的数値の世界のことだ。

ボクには数値を表わす術（すべ）はなかった。男と女のことについて言えば、「相性の星を見つけるのはもはや絶望的、あきらめなさい」としか、ボクには言えない。

同じ輝きの幽体光の持主を探すのは、夜空の星のなかから相手の星を探すようなもの。

ボクは毎日、《死者の指定席》で、いま、人には言えない苦痛を味わっている。

〝幽体光色度差〟がちがえばちがうほど、ボクの苦痛は大きくなる。

どんな美人だって、好みのタイプの女だっ

て、そんなことには関係ない。
ボクの死者の輝度と、生きた人間の輝度がたがいに感応し合うのだ。
波長の差にボクは痛ささえ感じる。胸の悪くなるような不快感、苛立ち、ボクと輝度の合う人間なんて、一人もいはしないのだ。
ああ、それから、ボクは多少は期待していたのだが、一人としていままでのところ、裸身が視えたなんてことはないのだった。
ボクは、自分が死んだということを自覚した、その日から、あの、ふわーっとしたあたたかな風でボクを包んでくれた「裸身の少女」を、待ち望む気持になった。
あれはたしかに一種のエレクト感覚だった。一つになる―どこかそれは男と女の抱き合う感覚と似ていたのだ。
だが、あのとき見失った少女に再び巡り会えるなんてことがあるのだろうか。
ボクはその確率について考えてみた。
山手線、クハ一〇三型、一〇四号車の≪死者の指定席≫に、あの少女が坐る確率についてであった。
一つ感覚になること―そのためにはボクは

少女の裸身を、しっかりと、抱き締めねばならないのだった。

東京・山手線の保有車数は大体のところ、五百輌余り、十輌連結の編成として、一日に内回り、外回りで五十本以上の列車が運行している。

一編成車輌の運行回数は十一、二回、山手線一周は約一時間五分だから、まあ、半日、十二時間ほどは、一編成車輌はレールの上をあくことなく巡っていることになる。

一年にすると、四千三百八十時間ということになるのだが…。

ボクの《死者の席》だけに限った数字だと、一〇四号車の座席定員は四十八人、そのうちの一つがボクの指定席だ。

生きた他人共が坐る確率は四十八分の一だが、あまり正確な数字を追っても意味はない。

山手線の一日の乗客は、四百数十万、乗りたり降りたり、席が空いていても坐らない者もいたり、乗客の少ない時間帯もあったりで、正確な数字などつかめるわけもない。

ある一日だけについてなら、数字を並べることができる。三百七十八人の男や女が、ボ

クの《死者の席》に座った。
また、今日も一日、ボクは不快な思いをしていた。
人は死んだその場所に、自分の幽体を貼りつけるーだれもが、そうなのかどうかは知らない。もし、ボクだけのことだとしたら、こんな不幸なことはない。
二つの偶然が重なった。
ブラットホームの階段下でとつぜん殴り倒された女と、ボクが擦れちがった不思議な，裸の少女‘、それでボクは自分の死に場所を与えられたのだ。運命の絡めの糸？それにしてもだ。この組み合わせとは、いったいナニ？
ざっと数えて、七十七万人余の人間を、この七年間にボクは《死者の席》で受け入れた。
一年三百六十五日、一日の座席利用者をほぼ二百人として計算した。
数字そのものに、それほどの根拠はない。切りのいい数字を選んだだけのことである。
三万人まではボクだって数を覚えていた。
だが、いつからか、そんな几帳面（きちょうめん）さを忘れた。
あまり意味のあることではない。

確率の計算式を出したところで、あの“裸身の少女”に巡り会える可能性があるのか、ないのか、まさしく、神のみぞ知るあやうさであったからだ。

だが、七年の余、ボクは《死者の指定席》に坐ることができたお陰で、人間の男と女の愛というものがいかに滑稽で、その上でたらめで、哀れなものなのかを知ることになった。

このことに関しては、神さまにボクは感謝しなければならないと思っている。

なんと言っても、お見通しの“霊眼”を与えられているのだから、仲むつまじいアベックを見ても、すぐにその輝度差がわかり、不幸な結末がボクにはわかってしまうのだった。

そう、ボクは恋を占う神サマの心境で、世の男や女たちを見ていたのである。

3

そんなわけで、七年前、ボクが死ぬことになった前日にさよならした美香のことについても、いまは冷静に話すことができる。

阿野美香は不意にボクの前から姿を消した。

ボクは美香の引越先を見つけた。

武蔵野の面影を止めた雑木林の外れに小公園があった。造られたばかりらしく、ベンチも外灯もまだ新しかった。

その公園に接した場所に、これまた建てられたばかりと思われる白い壁ばかり目につくコーポ風の建物があった。

二階建てで戸数は八戸、一階の一〇四号室、その外れの部屋で、美香は男と同棲生活を始めていた。

なにもかもが新しい―このことが先ず気に入らなかった。「まさか新婚気分でもあるまい」とボクはおぞましげに呟く。

もっと気に入らないことも見つけた。

銀色のステンレス扉に、男の名刺が貼ってあり、その横に、美香の字で名前が書き列ねてあった。

二年と少し、月に二、三度は抱き合ってきた仲である。体の感覚だけが生々しく残っていて、その未練をボクは断ち切れないでいた。

ボクは美香の胸を一突きしてやろうと、懐に工作用の切り出しナイフを入れていた。

「刺す勇気があればおれは若者だ」

自分では研ぎ澄まされたナイフを、わがこころの内に忍ばせているつもりであった。

真新しい部屋の、白い壁に鮮血が飛び散る―そう考えたら、なにもかもが新しいこの舞台設定も悪くはない。

初めて二人が抱き合ったとき、美香は「なんだあ、わたしの出血は滲む程度だったのね。がっかりだわ」と言った。

「どうせ、男に傷つけられるんだから、体中が血に染まるほど出血してみたいわ。強靭な処女膜（ヒーメン）がお望み、かんたんに女にされるのって、嫌なのよね」

これは抱き合う前の会話であった。美香は大いに意気がっていたのだ。父親が名の知られた彫刻家で、その芸術家の血を　引いているふうのことを、よく美香は口にした。それから、こんなことも言った。

「わたし、十五のときにね、真っ白の雪野をどこまでも歩いて行って死にたいと思った事があるの。北海道生れの女の子はね、白い雪野に抱きとられたいっていう想いがあるのよね。ほんとうにわたし、珍しく風のない日に、富良野のね、うちの近くの雪野を歩いたこと

があったんだ。凍え死のうか、胸を突こうか、わたしカッターナイフも手にしていたのよ。そのとき、ふとね、わたし、出血ってことばが鮮烈に想い浮かんだの。ああ、この死んだような静けさの白い雪の世界を、わたしの、そのときの赤い血で染めてみたいって……。ほんとうにいまでもあの雪世界のなかで処女喪失したい。それなのに、こんな汚ない東京の、あなたの四畳半のアパートで女にされるなんて、ああ、がっかりだわ」

美香の口癖は…がっかりだわ…であった。

それから二年余り、このことばの続きを楽しんできた結果が、とつぜんの「さよなら」になったのであった。

二カ月前のある日、抱かれるときの美香の態度がちがったことに気付いた。「もっとやさしくして」と、やや乱暴気味な、ボクのこれまでの性の処方の手を押し止どめた。

問い質したら他の男に抱かれたと言い、「あなたのときよりわたし感じたの」とさらりとした口調で告げた。

これは、美香がボクに報復したのだった。これほど嫉妬心の強い女はいない。

美香はボクの過去の女経験にも嫉妬した。問い質され、ついついボクも口をすべらせたことがあったのだった。

「いちばん凄かった女はボクを二日間寝かせなかった。ちゃんと回復させるテクニックをその女は持っていた。あーそれから、死体になってもわたしを抱ける？なんて訊いた女もいた。あれは心底好きかと、ボクの心を確かめるためにそう尋ねたのだろうな。体の美しさなら十六歳の女の子だな。乳首そのものがまだそれ自身のかたちを示していないんだ。だから、唇をかぶせると、薄桃色の乳暈（にゅううん）ごと、ぷくっと盛り上ってくる、あれは感激だったな」

洗いざらい、しゃべらされた挙句に、ボクは報復された。美香は他の男たちにも言い寄られているとボクに楽しそうに話した。

その結果が、他の男に抱かれてもっと感じたという事態になったのだ。

ボク自身に嫉妬心があろうなどとは思わなかったのに、ボクは嫉妬し、それから二人の仲はぎくしゃくしたものになった。

二人の会話もとげとげしいものになった。

「そんなにわたしのこと心配なら手錠でも嵌めて、それから表の電信柱にでもわたしを縛っておいたら。わたし、平気よ」
「そんな趣味はないさ。おれはさ、そんなことばの遊びよりも、もっと生々しく、美香を犯してみたいんだよ。その男と美香が経験していないことをさ、やりたいんだ」
「なによ、それ」
「うしろの蕾（つぼみ）の場所は乱暴に挿入すると括約筋（かつやくきん）が切れて、ぷつんと音がするってよ。おまえ、初めてのとき大出血したいって言ったよな。これだと望みがかなうよ。きっと」
「いい、そのうち、決心してあげるから」
この約束ごとはまだ果していなかった。
ボクは、コーポの扉の前に立ったとき、悪者ぶって自分にそう言い聞かせた。
「もう一度、この女を抱きたいだけだ」
それもサディスティックに。美香をおれは罰してやる、いや殺す、これは報復だ。
ボクは大いに気持を昂（たかぶ）らせた。
ぴんと気を張りつめた。
嫉妬心と未練心だけで、女のあとを追っか

けてきたなんてどうも惨めったらしい。
それで、あの約束ごとを果すためにボクはこの場に来た、と、今一度わが心に言い聞かせたのだった。「止めを刺す」、このことばの響きが、ボクは好きだった。
「それでサヨナラさ。おまえを獣の体位にさせてさ。乱暴にだ。腰を振り立ててやる。そうさ、アヌスの括約筋とやらも、お望み通り、ぷっつんてことになるだろうよ」
ことばのあそびをしてきた二人は、そのことばで傷つけ合ってきた。
最後まで、美香だってつき合うべきだった。きれいな訣れなんて、そんなものがあるわけがない。罵り合った上に、肉体の血の儀式だ。ボクが考えていることは、たぶん、お互いを惨めにするのだろうけれど、構うことはなかった。
耐えられないほど、惨めなら、一丁の切出しナイフだって手のうちにあるのだ。
扉の把手（ノブ）に手をかけた。
左にゆっくり回し手前にと引いた。鍵は掛かっていず、すっと、扉は開いた。
「あっ」

眼の前に美香が立っていた。
声をあげたのは美香であった。
外出するつもりだったのか、玄関のたたきに立った不意の侵入者と向い合うかたちになった。ボクは切出しナイフを取り出す。
美香のほうに突き出した。
「なによ。そういうやり方っていやなのよね」
「やらせろよ。この前、約束したアヌスの血祭りとやらをさ。それとも、このナイフで大出血騒ぎか」
「やめてよ。ここの男はね、わたしとうまくいきそうなの。もうとげとげしいゲームは終りにしてえ。わたし、あなたと付き合っていると神経がもたないのよね」
美香の顔は蒼ざめていた。
なんだか肩すかしを喰った気になった。
美香が二十一で、こちらは一つ上、悪ぶったあそびが似合う齢なのに、美香はふつうの女の子の顔になった。
尖ったことばで関心を惹こうとしたくせに、いまはもうおどおどしている。
「うまくいきそうだって。へえー」
強いことばを期待していたのに、これでは

立ち向っていく気にはなれなかった。
「でも好きなときもあったのよ。あなたのこと」
「ははあ、過ぎ去ったことなんだ」
「好きなときもあったってことで、終りにして。わたしたち、最後はどうなるのか、わたし怖かったのよ」
「ただのことばのあそびだったってわけだ」
「ほんとうに、わたしのこと、あなたが好きなのかどうかもわからなかったし」
ボクはすっかり戦意喪失し、だらりと垂れた右手の先のナイフを、もてあましていた。
「わかったよ。おれなりにだ。終りにケリをつけてやろうか。おまえと血祭りなんて、馬鹿馬鹿しくなったよ。しようがないから、おれ一人で、ジ・エンドのお芝居ってことにしてやろう」
ボクはナイフを握り締めた。
玄関を入った左側の壁は真っ白だった。
別にボクは、白い雪原を血で染めるイメージが好きだったわけではない。
初めと、終り、少しばかり辻棲（つじつま）を合わせるのが好きなだけだった。

つまり自己完結のあそびである。

ボクは切出しナイフの先で、左手小指の第一指頭部に傷をつけた。

すーっと一筋に切れた。たらたらっと血はいきなり玄関のたたきのコンクリートの上に落ちた。一気に血は噴き出したのだった。

殺意を持つーそんな緊張感もあったのに、結局はゲームになっていた。

ボクは、白い壁に…オレハシンダ…と血染めの文字を書いた。おれとお前の関係は終り、その意味を込めておいた。

死ぬことまでゲームになるとは思わなかった。美香と訣れた次の日、ボクは、山手線クハ一〇三型、一〇四の車輛の席に貼りついて死んだ。そうか、美香の逃げ込んだこの部屋のナンバーも一〇四号室、だけど、これは別に意味があるってわけじゃない。

いま思うこと、それは、二人はあまりに星の輝度差がちがい過ぎるということだ。

死んでみなければわからなかったなんて、情けない話だ、と、ボクは七年前の日のことをそんなふうに考えている―。

七年もの間にいろんなことがあった。

ひとりでものを考えられる時間、それは池袋車庫に終電車が入り車内に完全に人の姿がなくなったときである。

それでも、座席の背にはおもしろいものでちゃんと人型（ひとがた）だけは残っている。

三人掛けに七人掛けの席、それは行儀よく坐らない者もいるから、人型には、はっきりしたもの、ぼんやりとしたものと、いろいろとあった。

人間の男と女の絡み合いについて考えてみたりした。他人同士がくっついたり、離れたり、生れの星がちがうのだからそんなことは当り前のことだ。それなのに、吊皮につかまったままの男と女が馬鹿げた会話を、真剣に交わしているのをよく耳にする。

「うまく行くよ。二人は」

「うん、フィーリングぴったしよ」

「そういうの、愛の波長っていうんだ。牡牛座に獅子座、愛の占いだと相性バツグン。ね、永遠の愛って信じる？」

「うん、わたしそういうの、信じたい」

ボクはまた不幸なカップルに悪魔の祝福を贈る。星の輝きの差を言えば、この二人には何億光年の輝度の違いがある。

いま、地球に届いている星の光はみんな過去に投げかけられた光でしかないのだ。

たとえば、よく知られている北極星だって千百光年の距離、それなのに、人間は星の一つ一つが、自分たちの手近にあるように思っている。どれも手を差し出せば手にできると思い、好きな星を見つけて、自分と同じ輝きをもっているなどと錯覚してしまう。

だが、ボクが見ている夢は、そんな不確かなものなんかではない。

，裸の少女‘と、ボク《星輝度》は、間違いなく同じものなのだ。

だからこそ、あの時、感応したのだろう。

明日こそは、ふとすれちがったあの，裸の少女‘と会えるのではないかと思い、せめて、夢の中でもと、ほっそりとした裸の肩先のことを、ボクはいつも頭の中に思い描いていた。

嫉妬心だってあるから不思議だ。

少女は、そのまま少女でいるわけがない。

時は確実に刻まれていて、あの美しい少女はもはや、成人の齢を迎えようとしている。

ボクは七年余を無為に過ごしてきたのだ。

こころ痛むことは、輝度差のちがう不快な男たちに、ちやほやされることだ。

「相手に話を合わせることなんてないさ。ぷいと横を向いて、ただまっすぐ歩き出せ、男という男はみんな無視せよ！キミはボクのためだけに、この世に生れてきたんだから」

そうそう、おもしろい話もしておこう。

ボクが死んで三年と少し経ったある日のことだった。

冬の寒い日のこと。

窓ガラスが、がたがたと鳴るほど北風が吹いていた。かっこよく言えば、山手線クハ一〇三型車は肩で風を切ってつきすすんでいたことになる。

ボクは、前の晩からなんとなくそわそわしていた。予感があったのだ。あすは楽しい日になる、と、だれかが耳元で囁いたような気がしたのだった。

生きた人間たちとまたご対面したのは午前

六時三分であった。池袋車庫から引き出されて、五番線にと入る池袋駅始発電車は、入構してから、いつも数分待たされる。

ところで、始発時、期待とはまるでちがった。楽しいことどころか、初めに坐った女のために、ボクはかなりの苦痛を味わった。

もう、ボクの幽体（アストラル・ボディ）はきしきしと音を立て、いまにも裂かれそうに痛んだ。

中年の男と二人連れ、ラブ・ホテルに泊っての朝帰りってところ、女は髪を赤茶けた色に染めていて、電車のなかなのに、たばこを吸った。女も齢をとっていた。

赤いマニキュアをした指の爪は割れ、手指もかさかさしていた、

もう三十を一つ、二つ越しているかに見えた。どこかの安キャバレーで、ずっと働き詰めに働いてきたって感じだった。

いまは、不景気風が吹いて、そんな場所にはあまり客は寄りつかないから、時には体で稼ぐしかないのだろう。

生きたまま死んでるってのはこういうことなんだーボクは同情はしたが、女の顔を正視

する勇気はなかったので、座席に近づいたときは、こころの眼を閉じた。

化粧ののりが悪いのはろくろく睡眠をとっていないからだろう。いや、もうこの女は女なんかじゃないんだ。そうはっきり言うべきだった。「ああ、いやだ、いやだ、客を選べないなんて」この台詞は、座席に坐る乗客についてのボクの独り言だったが、女の呟やきの声にもなっていた。

さっきから、二人は座席に坐ったまま口論していたのだ。

「愛に金を払うってのはだな、好かんね。おまえ、おれのこと好きだって抱かれてるときに言ったじゃないか」

「いい齢して、あんた、一万円札一枚？」

「いいとこさ。なんならおまえのその体に値段をつけてやろうか。かまうことはない。ハンドバッグから鏡出して、自分の顔見てみろよ。夜のうちに消えるのを忘れたお化けってとこだぜ」

貧相な顔をした男の額は半分は禿げ上っている。どっちもどっちだった。それで、ボクは思わず吹き出しそうになった。

かなり近似（きんじ）の星の光を二人が持っていたからだ。嫌なところだけが似ている―そんな相似型を示す男と女がいるということがわかっただけ、これは収穫だった。

もっとも赤光色の三等星ってところ、冬の夜空の深い暗さでないとこんな星は肉眼では識別することが難しい。

楽しいこと？

いや、ボクには不快な連中だった。

世の中を薄汚なくしているああいう奴らは―ボクはこの思い上った考え方をこそ大切にしたいのだ。

ボクは、あの穢れのない裸の少女をわが幽体に受け入れたいのだ。

俗世間の垢にまみれるなんて、嫌なことだ。

さっさと、男だけが、四つ目の駅で降りようとした。口論はまだ終っていたわけではない。女もあわてて席を立った。

やれやれだ。

ボクはやっと苦痛から解放された。

楽しいこと？

それは午後の早い時間に用意されていた。

なにしろボクはこれから殺人を犯すことになるのだから。乞うご期待だ。

駅に着き、乗客を吐き出すたびに、冷たい風が車内には紛れ込んできた。

午後二時と少し過ぎ、薄陽は射していたが、冬の一日はやはり活気がない。

だぶだぶした上衣を着た人間たちだって、のろのろと乗ってくる。

相も変らぬ異星人たち、滴員電車で押し潰されそうになるあの苦痛をボクは今日もがまんしていた。

見知らぬ連中を、おのれの《死者の席》に招くなど、まったく拷問以外のなにものでもない。肌に切れ込んでくる北風なんて、まだ生易しいものだと思うよ。あれは過ぎ去るものだけのもの、いっときの気まぐれだよ。

ところで、ある日のこと、一人の女が、高田馬場駅で乗り込んできた。

「あっ…」と思った。

そう、青輝色系統グレード、マイナスニ百十三等と読めた。

ボクはグレード十四等、同じ星の系統だが、ずいぶんと、まだ色度差がある。それでも、一瞬、ボクは眼をぱちぱちさせた。

この日は、三年半ばかりの月日が経った日、すでに二十四、五万人ほどの乗客たちとボクは遭遇してきた。

席は一つしか空いていなかった。

齢は二十二、三歳、ぼわーっと女の体の輪郭が見えた。

色度差のせいか、女の裸身までは視えない。やはり一つ星の生れではないのだろう。

だが、車内に吹き込んできたのは、北風なんかではなかった。

幽体（アストラル・ボディ）の光の玉は人のかたちをしていて、少しばかり眩（まばゆ）いばかり光芒（こうぼう）を、あたりに放っていた。

もちろん、光の輪郭が視えているのは、このボクだけのはずだった、

誘われるようにであった。青輝色の星、マイナスニ百十三等の女は、ふわーっと光の玉だけの物体になってボクの《死者の席》に坐った。

そのとき、ボクの幽体（アストラルメボディ）に、幽体的変化が起った。

なんと言ったらいいのか、ふわっとボク自身の幽体（アストラル・ホディ）が軽くなったのだ。座席に貼りついていた幽体そのものが、少しだけ引き剥がされた…そんな〝体応感覚〟をボクは味わっていたのだ。

同時に、女のこころのうちが読めた。

すべてではない。

まだ完全一体化されてはいなかった。

いや、それはむりなことなのだ。

同化作用とは言え、ブラスマイナスニ百二十七等もの輝度差があるではないか。

ボクは、この女の極く一部と同調したに過ぎないのだ。それでも、毎日、味わわされていた色度差のちがいからくる苦痛から比べると、まだ、ましだった。

いつもは、べったりと≪死者の指定席≫に貼り付けられたままなのに、この時だけは、手足までもが、自由に動くような気がしたのだった。

女の考えていたこと。

仮にこの女の名をＭ子としよう。

M子は恋人のS男の胸を一突きにする気になっていた。

ボクは《死者の席》に坐ったM予と自問自答を始めた。

―M子さん、きっとS男って男、銀河系の外の星の生れさ。男と女の揉めごとって、そう深刻に考えることもないのにー

―わたしはS男を愛してるの。女のね、歓びを授けてくれたのはあの男なのよ。わたしもう離れられないわー

―そんなに相性がいい？信じられないな。なにかのまちがいだよ、きっとー

―わたしたち結婚するのよ、カレに約束させたの、それから離婚させるためにカレの奥さんに一月ほど前、手紙出したのよー

―ああ、不倫の恋か、それでー

―S男はでも優柔不断なのよね。しつこく迫ったら、とつぜん、わたしと会わなくなったのよ、許せないわー

―それならやるっきゃない。ナイフで相手の胸を一突き、死ぬほどの恋だろ、M子のはー

―今日で終りにするかどうか、わたし、はっきりさせなければならないのよー

―そりゃいい、挫けちゃだめだ。キミにはボクがついているんだからねー

最後の一言はボクの独り言ってことにしておこう。

M子は、結局、山手線を一周することになった。一時間五分の所要時間で、また高田馬場駅にもどってきた。

M子とS男は大体のところ、週一回の男と女の関係、S男と妻の間にはまだ子供はいない。離婚を強要した手紙を出してのち一度抱き合っただけで、その後、S男はM子のアパートに来なくなった。

携帯でメール通信をするのだが、いつも無視され続けていた。一方的に今回も相手にメッセージだけ伝えた。[午後一時よ。アパートに来て！来ないとわたし死んじゃうから]と。

だが、やっぱりS男は来なかった。

ふらりとアパートを出てからブラットホームの先端に立った。飛び込んで死んでやろうと思った。だが、果せなかった。

人に肩を押され、山手線に押し込まれていた。不快な思いをした。

座席に坐ったら、急に、殺意が滾（たぎ）

ってきた。
―だれを殺す？―
とボクが訊いたらM子は、
―S男の奥さんよ。あの女がいるから―
と頭のなかの会話をボクとM子は交錯させた。高田馬場駅で一旦、降りる気になったのは、もう一度、男の自宅に電話を掛け、自分のアパートにS男を呼びつけようと、M子が考えたからだった。
M子が《死者の席》から立上ったとき、ボクも一緒に、M子と一つ体になって歩いていた。ボクは自分の足で、歩いている気になった。《死者の指定席》に眼をやった。やはり、そこにはもう一人のボクが坐っていた。
いうなれば、ボクの幽体（アストラル・ボディ）は半分だけ、M子の肉体を借りて、ちょっと散歩に出ることになったのである。
よーし、どんな星の生れの男なのか見てやろう、とボクはふるい立った。
それからS男が、異星人だったら、かまうことはない。殺（や）っちまおうとボクはM子の思考パルスに強い電気的信号を送っておいた。

M子は、駅の近くの刃物専門店に入った。
ボクの趣味が出た。何年ぶりかの買物だ。
切出しナイフなんかじゃ殺意も殺がれる。
ボクは反りの強いナイフを選ばせた。ロック・バックスタイルのもので、全長十三センチ、握りの部分に安定感があった。
鋭角な先端の反り、刃身は全体の三分の一、隙のない造りだった。
手にするだけで、ぞくっとする。
M子だって緊張感に唇を震わせた。
今夜あたり雪が降り積もればいいなとボクは思った。「白い雪に赤い血だ！」S男の妻でも美香でもいい。鮮烈な血の光景さえあればいいのだ。やはり、生きていた時のことが、ボクの頭には思い浮かんだようだった。
都営住宅の独身者用アパート。冬の風に足元をあおられながら、こつこつと四階まで階段を上るのは侘（わび）しいことだった。
鍵を差し込む。
もう午後四時にはなっている。部屋のなかはすでに薄暗く、その上、寒かった。
一DKの部屋には備え付けのベッドがあった。すっかり体の冷えたM子は、外出着のま

ま、ベッドのふとんのなかに足を突っ込んだ。
そこだけ暖かった。電気毛布のスイッチはONのままだった。
S男と抱き合うために予め、M子はふとんのなかを暖かくしていたのだ。
きっとスイッチを切り忘れて出たのだろう。
男と女の性の営みのときの饐（す）えたような匂いが、ふとんには染みついていた。
M子は男の体臭を嗅ぐと、ぽろりと泪をこぼした。
が、急に怖い顔になった。
ロック・ナイフのボタンを押すと、かちっと音がして、あの鋭角の切先が飛び出した。
S男といまから会えなければ…決意を促すために、鈍い光を放っている薄暗闇のなかのロック・ナイフの刃先を凝視した。
「うちの奴を意識して、自宅に電話してきたら、そのときは訣れる」
とM子はS男に宣告されていた。
M子は初めて抱かれるとき、「わたし奥さんがいる人でも平気、うるさくなくていいもの」と言った。それが、S男の巧みな性技に女の歓びを授けられてから、S男の奥さんに対し

て嫉妬心を持つようになった。

独占欲が出てきた。それに両親が結婚について口うるさく言うようになった。M子は世間に認知される関係を望むようになったのだ。

M子はダイヤルを回す。〇四二×の市外局番号、東京郊外にS男の家はある。

呼出音が耳に入った。

が、何度掛けても相手は出ない。

「はじめから予定があったんだわ。S男は奥さんと二人、どこかに出かけているんだ」

M子は力なく受話器を下におく。

ぽかぽかと足先だけは暖かい。

が、M子は暖かさの感じなど知覚してはいなかった。

十冊ほど本の並んだ本棚に手を伸ばし、一冊の本を取り出す。ぱらぱらとページを繰ると一枚の紙片が下に落ちた。

S男の住所が控えてある。

S男がシャワーを浴びている間に、身分証明証の住所を書き写した。

ボクは「いいぞ、あの街の近くだ」と呟やいた。三年ほど前の美香との訣れの日のことを考えた。同じ方向になる。

これはちょっと寄り道をして、その後の二人についてレポートしなくちゃ、と思った。

M子の肉体を借りていることになるが、半分ほどはボクもM子になりきっていた。

「さあ、ロック・ナイフを手にしろ」

とボクはM子をけしかけた。

場合によっては、美香の胸を一突きできるなどと、ボクは自分勝手な考えにとりつかれてもいた。M子の手が動く。外出する気になっていた。手に触れたハンドバッグには、兇器がおさめられていた。

やっとM子は、電気毛布の暖かさに気が付いた。一家団欒（だんらん）の暖かさとは似ても似つかなかった。わびしかった。

この暖かさに敵意が湧いた。

今度は、スイッチを切った。明りを消す。

真っ暗な部屋から再びM子は外に出た。

6

ボクはいまは乗客の一人だった。

山手線内回りで二つ目、新宿駅で降りた。

それから地下通路を歩き、私鉄線の駅にと向

かう。郊外へと伸びる特急電車に乗った。
ボクは一人で別のことを考えていた。
美香をどうするかについて頭を巡らしていたのだ。ともかく、美香という女は凄いやきもちやきなのだった。わがままな女だから相手を独占していないと気がすまない質なのだ。
こんなことがあった。
ボクの好きな女優と街で擦れちがった。ボクは見とれ、立ち止まったままその女優を迎えた。心奪われ、全身がエレクトし、ボクは棒立ちになった。
美香はボクがその女優に見惚れたことに、「がまんならない」といった顔になった。
ふーっと肩で息をし、ボクが女優を見送った。と、横にいた美香が消えていた。
好きなタイプの女性に会うとボクはしばし見とれる癖があった。その気配を察するとも美香は口をきかなくなる。
嫉妬心の強さについてはエトセトラ、訣れる原因になったのだって、美香の嫉妬心から端を発したことではあった。
よし、このストーリイーでいこう。
やっぱり悪い癖が出ていて、ボクはサディ

スティックなゲームを、仕込むことにした。

さて、M子は、前の席に坐った仲のよさそうなアベックに気をとられていた。肩を寄せ合い、男と女は一つマフラーでつながれていた。頬と頬もぴったりとくっついている。

ボクは見馴れた光景に眼をつむった。

やっぱりあれは他人同士、ボクには二人の星の輝度差が視えていたから、別に羨ましいなんて感情は、湧かなかったのだ。

特急電箪は四十分後に私鉄郊外の駅にと着いた。終点だった。いまからM子が訪れようとしている地点は、前にボクは来たことがある。S男の住所のある地域は、美香の住むコーポのあった番地近くの距離にあった。

駅前からバスが出ていた。

ボクがコースについては教えてやったのでM子は迷わず、目的地行きのバスに乗った。二十五分かかった。その地に降り立った。

もう午後五時を過ぎていた。主街道沿いにあるバス停に降り立ったとき、もうあたりはとっぷり暮れ、暗闇の街になっていた。

ともかく風が冷たい。

こんな時間に見知らぬ家を探すなんてむり

なんじゃないかな、とボクは思ったが、M子は何度も番地をたしかめてから歩き出した。

養豚場があった。

中学校の暗いグラウンドには風が舞っていた。暗さの底に沈んだような感じの神社があり、杉の大木がわさわさと揺れていた。

小路を曲がり、街灯を頼りに番地をたしかめる。門札に近づいたら、とつぜん犬が吠え立てた。

―おお寒い―これでは〝マッチ売りの少女〟と変ることはない。毛糸の手袋をしているのに、M子の指の先はかじかんでいた。

―もう止そうよ。S男なんて男、きっと、ろくなやつじゃないさ―

―わたし、今夜のうちに決着つけるんだから。死んじゃうか、結婚するか、わたしには二つに一つしかないのよ―

二時間近くも、M子はうろうろしていた。

結局、S男の家を探し出すことはできなかった。ボクはM子をS男の家まで連れて行ってやろうと思ったが止めた。

他人のことはどうでもよくなった。

―さあ、今度はボクの番だ―とボクはM子の

頭のスイッチを切りかえさせた。
バス停で四つ、歩くとかなりの距離である。道に迷ったM子は、元来た道に出ようとしてどんどん歩いた。ボクが誘導したから、あの白いコーポの隣接地にある小公園に出た。
ひと先ず、敵状視察だ。ボクは、一〇四号室の扉の前に立った。もう名刺ではなかった。
陶板製の表札が接着剤で貼りつけてあり、男の名と美香の名が記されていた。
「へえ、結婚したんだ」
よっぽど相性がよかったんだろうかと、ボクは首を傾げた。
いや、そういう思いに、一瞬なった。
投函口が扉の下部にはある。
ボクは、その相性とやらをたしかめるために、投函口の隙間からなかを覗いた。
人間としての姿かたちなどどうでもいい。
幽体光度差、おまえたちは一体どこの星から来たんだ…。その星の出生地をたしかめることができればそれでいいのだった。
ああ…これは祝福すべきだ。これほど楽しいことがあろうか。
一等星は六等星の明るさの百倍、明るさの

標準になる一等星より明るい星は、ゼロなどと呼び、マイナス一等、二等というふうに遡（さかのぼ）って計算する。

さらに、六等より暗い星は七等、八等と数宇が増えていく。

さて、世に知られる一年一度のせつない逢瀬、七夕の日の織女星と牽牛星の大ロマン、数字で表わすと織女星はマイナス一等・牽牛星はゼロマイナス九等、光の差だけでも距たりあり。相思相愛の物語だって、このインチキさかげん、人間ともなれば…あえて説明するまでもない。

二人とも暗輝色系統の星の生れ、それで相性がいいとでも、考えたのだろうか。

だが、男は暗青色、美香は暗赤色、グレード差をいうなら五ケタの数字、こんな男と女、絶対にうまくいくはずがない。

ボクは青輝色グレード十四等の男だ。

美香との輝度グレード差は、他の天体から来た男と女ほどもちがっていた。

やっぱり、ゲームのあそびにしよう。

ポケットの携帯電話をM子は手にした。

〇四二×……、M子は眼と鼻の先の美香の

住むコーポの一〇四号室のダイヤルを回した。
ボクがそのように仕向けた。
気持はＳ男を呼出しているつもり、いや、Ｓ男の妻が出ることをＭ子は願った。離婚させるために直談判する気になっていた。
発信音がし、すぐに相手が出た。
受話器を手にしたのは美香だった。
「もしもし、わたしです」とＭ子。
「わたしって？」
「奥さん、離婚してくれるんでしょう。わたしたちはね、もう二年も肉体関係があるんです。わたしはあのひとの子供を生むつもりなんですからねっ」
「あの…あなた」
「そう、もう百回以上よ。抱かれるたびに、二度はわたし求めるからその倍かしら。それにね。わたしの場合はカレって本気なの、だからわたし何度も性の行為中に失神したことだってあるのよ。嘘じゃないの、この話は、離婚して下さい」
とたんに電話は切られた。美香は耳をふさぎたくなって乱暴に受話器をおいたのだ。
一方、Ｍ子は放心状態だった。

それはそうだ。M子はM子自身ではなく、ボクに操作された操り人形だったのだから。

ぶーっと、なおも受話器は発信音を発していた。しばらく、M子は一方通話の音を聞いていた。ふと正気にもどった。

やっと携帯電話を脇に置く。

「あの人、やっぱり、家にはいないわ」

M子は、とぼとぼと歩き出した。

三、四十分も歩いただろうか。M子は街道沿いの大きな河の川原にと降り立っていた。

堤防の際に坐り、背をかがめるとひひゅっと、北風がM子の肩先に切り込む。

ふと夜空を見る。

冬の星座が視野の遼くにあった。強い風に払われてか、空には一片の雲の影もない。

それだけに星空がきれいだった。

オリオン座の左下の位置に、恒星のなかではいちばん明るいといわれるシリウスの輝きがあった。ちりばめられた屋の数にM子は魅せられていた。

「わたし、死のうかな、やっぱり…」

ぽつんと呟やいた。夜空の星の一つになれたらいいなと、M子は思ったのだった。

ところで、M子とS男のことは、大暗転のストーリィになった。

いや、世間並みのことばでいえば、ハッピーエンドってことになるのかな。

いやいや、やっぱり、悲劇だ。

晴れのち曇り、そんな状況のことは、人間世界では、暗い結末とかになる。

その夜おそく、M子は自分のアパートに帰った。と、その部屋では、S男がM子を待っていたのだ。

S男は部屋の鍵を与えられていた。

「S男……S男ったら」

M子は絶句した。もう絶望の淵に立っていたのだから、これは満天下の星座のなかに手を差し伸べ、超一等の輝きの星シリウスを手に掴みとったようなものだった。

体は冷え、こころは冷め切っていた。その可哀相なM子に、暖かな抱擁が待っていたのだ。これほどの感動的な愛の時間はない。

が、ボクは暗然としていただけだった。

しばし、ボクはボク自身になった。M子の体を借りてエレクトする気にはなれない。

だいいち、ボクは生前は男なんだから、S男の愛撫など受け入れられるはずはなかった。

ただの見物人…。

ボクはM子の、生身の裸の体と、性の営みにおける女の狂乱ぶりを、少し醒めた眼で見ていたのである。

せっかく手に入れた超一等星シリウスのご登場だったが、これまた、異星人、暗赤色系統のはるか下限の暗さの星、シリウスのあのちかっとくる白輝色の輝きとは、似ても似つかぬお相手であった。

「S男……わたし、あなたを欲しかったの」

あとは、うねり声が強調された喘ぎの声ばかり、ボクは肉体とお互いの星の相性はまるで関係がないのかと、ただ呆れ顔でこの愛の修羅場を見ていた。

そうだ。たしかに愛の修羅場だった。

これは肉体的痛さだ。

ボクは暗赤色系統の人種が、いちばん、わが幽体（アストラル・ボディ）に苦痛をもたらすということを知っていた。

これまでに、すでに階赤色系統の人間どもをボクは≪死者の席≫に何万体も迎え入れていたのだ。そのときの激しい苦痛のことを考えればいかに、幽体光差が異なるかわかろうというもの。心体だって、ぼろぼろになるほどきりりと痛む。

そういえば美香も暗赤色系統、ボクはあれが性的快感だと錯覚していたのだろうか。あんなもの…やはり死んでからこれは知ったことだった。

全身的緊張のあとには全身的弛緩。

寒さのあとには暖かさがあった。

M子は鼻にかかった甘い声まで出している。

S男はいつもとくらべてずいぶんとやさしかった。それでM子はもう一心同体になったつもりでいるのだった。

少し二人の会話に耳傾けよう。

―あいつとは結局訣れることになったよ。ここ二週間大もめでさ、今日はあいつの実家に行ってきた。離婚は向うから言い出しんだ―

―それじゃ、わたしたち、結婚できるのね、よかった。これで田舎の両親も喜ぶわ。ね、結婚式はいつにする？―

いやはや、気の早いことだった。Ｓ男は、妻に愛想をつかされてさよならを言われた。

別に魅力的な男でもない。なにより、幽体光度差を見れば、またまたＳ男がＭ子と訣れることになるのは当然の帰着であった。

Ｓ男はそのとき、頭のなかで、「結婚するならもっといい女がいるのにな」と思っていた。

この考え方はまちがいではない。

不幸になるカップル、そんな予感をＳ男が持ったというのは正しいことだった。

なんとなくそう感じていたのだが、これこそが幽体光度差の感じのちがい方、Ｓ男の第六感も捨てたものではなかった。

Ｓ男がこのアパートにやってきた理由はねひとときの慰めが欲しいからだった。

それだけのことである。

寒い一日だと思ったら、夜半からボタン雪が降った。二人がシングルベッドで肩を寄せ合っているうちに、雪は降り積もり、外は一面の銀世界になった。

二人はそんなことは知らない。ぽかぽかと暖かい春の便り、Ｍ子なんかは死の代りに結婚を勝ち取ったつもりで、いうところの薔薇

色の夢を見ていた。

ボクは、窓にふーと息を吹きかけ、水蒸気を払ってから、眼下の雪の世界を一人で見ていた。しんしんと雪は降り積もる。いい表現だとボクはいい気なことを口ずさむ。

暗さが沈んでいるのに白の明るさがある。静けさが、積もった白い雪のなかに吸い込まれて行く。

ああ、あれは死の世界でもある、

などとボクは考えていた。

夜の暗さとともに、モノクロトーンが強調されていた。

この二人をどうしようか、これは死神になったつもりのボクの独り言である。

白の雪の世界に、赤い血の配色、ボクは美香のことばを思い出したが、この二人のためには死に際の美しさなど不似合いのように思えた。血が雪を汚す、

そんな発想だってあるはずだ。

ことのついでに、ボクは美香のことを考えた。いまごろ、あの一〇四号室ではやきもちやきの美香が泣きわめいているだろうなと思った。―もう二百回も抱き合った―。M子が

自分とS男との情事になぞらえて、真実めいた話をさっき電話口から伝えた。

あのM子を使っての代役劇は真に迫っていた。効き目は充分だった。美香の頭からは二百回という数字が、一生消えないはずだった。

それともあの二人は訣れるのだろうか。訣れたからって幸せになれるわけでもない。いつかの安キャバレーの女のように美香だって生きている限りは齢をとる。可哀相に。

ボクは二十一歳で死んだから、いまもそのままだ。

そうか、生きたまま死んでいる、そういう殺人の方法だってあるな。

罰してやるには死ぬまでの刑だ。美香は老いさらばえて死ねばいいんだ。

さて、この二人をどうするかだ。

M子はボクの今日一日に楽しみを用意してくれた。少しだけ幸せをやろう。

二人は朝、目覚めたとき、雪の白い反射光に気付き、窓の下の世界を眺めて「わー雪だ」と言った。それから「おお寒い」と言い、ストーブに火を付けてから、またお互いの肌のぬくもりを求め合った。

「別に出発の朝でもないのにさ」
ボクは皮肉っぽい口調になり言った。
それからのことはくどくどしく書くことはない。悲劇？うーむ、どうなんだろう？
アパートを出てS男が、雪の世界にと足を踏み出したときのことである。一部始終を記すと、こんな状況となるのだが…。
S男は私鉄駅のプラットホームの上で、凍結面に足を取られ、すべって転んだ。
打ちどころが悪く脳内出血し、痛院に運ばれて死んだ。変な場所だ。人間が死んだ場所に幽体（アストラル・ボディ）を張りつけるのだとしたら、これからは、みんなに踏みつけられることになるのだろうかと、ボクは馬鹿なことを考えた。
ボクは再びM子を、ボクの《死者の指定席》に伴った。M子の半身にボクの半身を預けた。
元の状態にボクの心身は復した。
これまで通りの日に戻された。
あの，裸の少女‘を《死者の指定席》で、やはり待つことにした。
運命の出遭いの日がやって来るまで…。

七年と十一日目のこと、ボクは花嫁を≪死者の席≫に迎えることになった。

窓の外の風景は五月の光量に満ち溢れ、樹々の緑は美しく照り映えていた。

そう「五月は残酷な季節だ」と謳（うた）った詩人なんぞもいた。

その日のことを語ろう。

山手線クハ一〇三型、一〇四の車輛、ボクを≪死者の席≫に導いてくれたあの「裸の少女」が、五月の光をボクに届けてくれた。

午後三時七分のことだった。ボクは確信していた。すでに前の日から予感はあったのだ。

M子のときとはまるでちがう。

ボクは生きた人間たちと同じように、五月の風光を全身に浴びている気になっていた。

眠っていたものが目醒める、死んでいた者が生き返る―一言でいえば全身のエレクト感覚とでもいうべきものだった。

満ち溢れる光の季節なのに、ボクの花嫁はもっと輝かしい光体を持っていた。

もう少女ではない。

生きた人間の目で見れば、彼女は麻素材のトラッドシャツに、レースジャケット、それに風を一林にはらませた裾広のティアードブリーツ姿、すべて白の、とても初々しいファッションに身を固めていた。

ボクはといえば、ただ体を震わせ、固く瞼を閉じていた。

ちらと視たその裸身はもう少女のそれではなかった。「とても美しいフォルムだ」とだけしかボクには言えない。

青輝色のグレード十四等の女、ボクとまったく同じ星の生れだった。

車両の前扉の位置から離れ、一歩、その、ボクの花嫁候補の女が歩んだとき、もう、それだけで、ボクの眼は暈（くら）んだ。

≪死者の席≫に坐っているボクの体感はといえば、すでに快い光に包まれていた。

そう、光溢れる五月の野をボクは裸で駆けていた。瞼の裏に、光の網膜が入り込んでいた。その感覚が全身に広がって行く。

身も軽くなっていて、ボクはなにか叫び出したかった。が、現実の絵図は、ボクの好きな光景なんかではなかった。

《死者の席》は空いていたが、一人の初老の男が中途半端な坐り方をしていたので、三分の二ほどのスペースしかなく、ずっと、だれもその席に坐れずにいた。

それから、ボクの花嫁は、見たところお似合いの男を伴っていた。

二人はボクの《死者の席》から二つ向うの席の吊皮に掴まった。

―あすが、けいこさんとの結婚式だなんて、まだぼくは夢のようだ―

―わたしも…―

ボクは思わず叫びそうになった。

ああ、止めて欲しい。

その男の幽体光は最悪の暗赤色系統、これ以上の不幸な組合せがあろうか。

「けいこはボクのものだ。このボクは七年余もの間、たった一つの奇跡を信じて、この席に坐っていたのだ」

思わず、ボクは独りごちたが、もちろん、相手にはボクの思いは届いていなかった。

いや、男の存在など、この際、ボクにはどうもいいことだった。

ボクの《死者の席》に、ボクの花嫁候補の

女が坐りさえすれば、ボクらは一体感を持つことができる―そのことだけがいまは問題なのだ。

それなのに初老の男が席を立ち、降車したとき、ボクの≪死者の席≫には、結婚相手だという若い男が坐った。

ボクは苦痛に顔を歪めた。

席は二つ同時に空いたのだから。ボクの隣りの席に、すんなり、けいこと言う名の女が座ればいいものを、まるで邪魔するかのように結婚相手の男が、合体して来たのだ。

けいこなどと、この男をまねして呼ぶことはない。K子でいい。アルファベッドの頭文字をボクは、この場合は借りることにする。

K子は膝の上に、プルトンの鍔広（つばひろ）の帽子の入った箱をおいていた。

ちらとボクは眼に止めた。

もう、隣りの席に坐っているだけで、ボクはわれを忘れていたのだが、ふと妙案を思いついた。二人に会話をさせる。

―ね、この白い衣裳に白い帽子、似合うと思わない？わたしかぶってみたいなー

―かぶってみれば？ほんとはさ、さっきデパ

ートの姿見の鏡の前にきみが立ったとき、お似合いだから、そのままかぶっていけばって、ボクは言おうとしたんだー

ボクはK子の思考を操作できる能力があることを忘れていた。

同じ星の生れなんだ。

K子はデパートの紙袋のなかから帽子の箱を取り出し、そっと蓋を開けた。

ちょとおどけた顔をしてみせ、白いブルトンの帽子をかぶった。

いやボクがかぶらせた。

「ああ、チャンスだ」これは、得たりや応の、ボクの呟やきの声であった。

≪死者の席≫の後の窓は二重になっていて開かないが、K子の坐っている席の窓は半分ほど開いていた。ボクにはK子のファッションが、花嫁衣裳のように見えた。

五月の薫風によく似合う。

ひゅっ！ボクは口笛を吹く気分で、そのとき、窓から風を引き入れた。

鍔広（つばひろ）の白い帽子は新婚旅行のために買われたもの。ちょっと意地悪だったが、これはボクのための白い衣裳、ボクはK

子を≪死者の席≫に迎え入れるために小細工をしたのだ。ふわっと白い帽子は浮かび上り、床の上にと飛んだ。

K子が半分腰を浮かす。

その前に騎士（ナイト）のつもりの男が、さっと席を立っていた。

ボクはK子の思考経路（パルス）に呼びかけた。「さあ、あなたの席はこちらですよ」と。

半分腰を浮かしたK子は力なく坐り直す。

そのとき、ボクはK子を≪死者の席≫に引き寄せていた。

―ああ、ボクはK子の裸身を抱き止めていたのだ。熱感が全身を駆け巡った。今度は完全にボクの幽体は、K子の裸身と一つになっていた。ボクの幽体に毛穴があるのかどうかはわからないが、毛穴がすべて開き、全身がエレクトする勃起感応を、ボクは感じとっていた。完全に、K子のすべてをボクは所有していた―

K子の肉体をこのまま借りて、生き続けるべきか、それとも…。

世間的に言えば、そのときボクは恐ろしい

想念に取り憑かれていたことになる。ボクはK子に哀しい想いを抱かせるのを止めた。

「こんな男とわたし結婚していいのかしら。もしかして、悪い夢を見ているのでは…」

ほんとうは、ぼくはK子の頭のなかに、こんなことばを用意してやりたかった。

だが、生きていることの喜び、生の輝きなどというひとときもあることを思って、死者からのメッセージを、このときだけは送ることは止めた。

あと十数時間の「生の時間」だ。

死ぬことの予感だとか虞（おそ）れ、そんな思いをK子に抱かせてはならない。

ボクは愛のたしかさについて語ることができる“絶対神”の立場にある。

今夜は、明日のための夢を見る―K子と共にだ。そうさ、ボクはK子と明日、結婚式をあげるのだ。もはや、そのような運命下に二人は置かれているのだ。

K子は楽しい夢を見るべきなのだ。

白い帽子を拾った男がもどってきた。が、もうこの男のことなど気にはならなかった。

くどくどと、男が慰めのことばを並べた。

十数分後、男は名残り惜しそうに後を振り返りつつ、「明日からは二人はずっと一緒だよ」とK子に告げた。

「最後の訣れさ。往く往く、不幸になるカップルに明日なんてないのに」ボクは快哉（かいさい）の叫びをあげたくなっていた。

ほんとうにK子を所有しているのは、このボクなんだから。

その資格がある同士、二人は青輝色・グレード十四等星の生まれなのさ。

「バイバイ」

K子が結婚相手のはずの男に手を振る。

男の姿が視野から消えたとき、K子は独り呟やく。ちょっとした不吉な予感とでもいうべき台詞だった。ボクがそう言わせた。

「バイバイなんて言うんじゃなかった。じゃあ、明日ね、で、わたし、よかったのに」

五月の風は爽やかだっていうけど、ほんとうに、この日の朝は薫風そのものだった。

若葉は透けて見えた。

朝の光が突き刺さり、時折り、風の間に間に、木洩れ陽のような斜光がこぼれた。

K子はちょっぴり開けた浴室の窓から、自分の家の庭樹の一つを仰ぎ見た。

…お嫁さんになるんだからね…

K子の母親が、この朝、風呂をたてた。

それで、K子は白い浴室のタイルの上に素っ裸で立っていた。石鹸のあぶくで全身を撫でられるととてもくすぐったい。

この感覚は同時にK子の感覚でもある。

ただボクはK子の美しい裸身と一つ身になっていたいという思いだけで満たされた。

K子はまだ男を知らない。

結婚する男性に処女を捧げたい。

そう思って二十歳まで過してきた。

白いあぶくは、K子の薄い紅色の乳首を包み隠した。あぶくだらけの右手が、そっと閉ざされたままの蕾の場所を探った。

その右手はボクの意志の通った右手でもあった。「そう、きれいなままさ。きれいなままでK子はボクの花嫁になるんだ」

それから、四十分後のことであった。

K子は朝の散歩に誘われた。

日曜日の朝、まだ、住宅街は静かだった。

洗った髪が乾いて、ふわーっと風をはらん

だ。眼の上に急坂がある。
道の両脇には銀杏の並木があった。
朝の太陽は、坂の上の空から上ってくる。
すでにその位置にはなかったが、下りの坂道一杯に陽光がこぼれていた。
この坂道にはK子は思い出があった。
夕暮れどき、西陽をまともに受けながら家に帰るとき、どこかの家からピアノの曲が流れてきたりする。「ああ、いいな」K子はそんなことを呟やいたものだった。
この、坂道とも今日でお訣れーちょっぴりK子は感傷的になった。
それから自分の生れ育った家とも…。
古い洋館建ての家に向けて、K子は、「さよならね」と手を振った。
K子は後向きになり一歩一歩、坂を上ったのだった。わが家が一歩ごとに遠ざかって行く。
こんなふうにして、わが家を眺めるのは初めてのことだった。
心から、想い出の詰まった我が家に、K子は「さよなら」が言いたかったのだ。
と、そのときであった。
エンジンの爆裂音がし、一台のナナハンの

バイクが坂の頂点に立った。
朝の光がその背できらりと輝く。加速したまま、バイクは一気に坂を駆け降りた。
一人の少年の視野の先にはK子の姿などなかった。真っ直ぐ突きすすんだ。
あっという間の出来事だった。
K子の体が宙を飛ぶ。鈍い衝撃音がし、坂道に一筋の赤い血がつーっと流れた。
ボクはボクの花嫁を抱き止めた。
ボクが死に誘（いざな）った。
永遠の愛、青輝色グレード十四等の星が、いま、一つになったのだ。
<血の儀式>は初血の誓い。
ボクは聖なる初夜のまね事をしただけのこと、このことを、残酷などとは言わないで欲しいー。

（了）